



## 海外の大学に進学した人たちは どう英語を学んだのか

加藤紀子 著  
ポブラ新書  
税込価格 979円

新型コロナウイルスの感染が拡大する前から、最近の日本の若者は内向き志向で海外への興味関心が少ないとか、安定志向で海外に出ようと言わないと言われてきた。しかしその一方で、日本の高校を卒業した後、海外の大学に学部からの正規留学を目指し、進学した学生がメディアを賑わすようになった。今年四月の兵庫県芦屋市長選で初当選した高島峻輔氏は、最年少での当選者であると同時に、日本の高校を卒業後ハーバード大学で学んでいたことも話題となった。現役の海外大生が中心となる情報提供や進学支援などを行っている特定非営利活動法人・留学フェローシッポの理事長でもある高島氏は、本書の中で海外の大学への進学が増えている背景として次の三つの要因を挙げている。一つ目は海外の

大学に進学している人と触れ合う機会が増えたこと、二つ目は給付型の奨学金が増えたこと、三つ目は海外の大学に出願するノウハウが普及してきたことである。

著者は、こうした背景から、最近では都市部の私立難関校に限らず地方公立校や非進学校でも海外の大学が進路の選択肢として加わるようになり、志願者の裾野が広がってきていると述べる。

では、そんなチャレンジ精神をもった高校生たちは、日本の教育制度の下で、何をきっかけに海外の大学を目指し、どのように英語力を身につけ、進学を実現していったのだろうか。

教育分野を中心にさまざまなメディアで取材、執筆をしている著者の本書での問題関心は、日本の英語教育や日本人の英語力である。今回本

書では、日本で生まれ育ち、高校までインターナショナルスクールではない日本の学校で教育を受け、そこに身につけた英語力で海外の大学に進学した人たちが、いわゆる帰国子女ではない生徒へのインタビューを通じて、日本でどのようにして海外の大学で学べる高いレベルの英語力を身につけ、そしてその英語力を留学先でどのように磨いていったのか、専門家の見解も交えて、その英語学習法を紐解いている。

著者は、学生へのインタビューの結果、日本にいながら高い英語力を身につけるために、次のような八つの秘訣を導いている。①記憶に残る「英語は楽しい」という経験、②「英語は欠かせないもの」と感じる環境、③自分に合った方法で単語力を爆上げする、④文法の「型」をマスターする、⑤独り言でも英語を話す、⑥日常を英語に浸す、⑦ググる力を身につける、⑧やり抜く力、である。

また英語の基礎的な力がついたところから、さらに英語力を伸ばすには、次の二点が重要であることを明らかにしている。①ネイティブスピーカーと同じ土儀には立てないと聞き直る、②スポーツや音楽など自分が好きなことを入り口に英語力を上げる。さらにそこから飛躍的に英語力を伸ばして英語の「壁」を乗り越

えるには、③多様な人たちと話してコミュニケーション力を上げる、そして「世界で使える英語」を身につけるための長い道のりを歩き続けるためには、④英語力を伸ばすモチベーションのエンジンを備える、ということも挙げている。経験者が語る具体例もとても興味深く、参考になる。

そもそも海外の大学に進学したいと思った時、まずどうすれば入学できるのか、入試には何が必要なのか、どのくらい費用がかかるのか、わからないことだらけであるが、本書はそのような情報も提供してくれる。

かく言う、公立高校に通ううちの息子も突然、海外の大学に進学したいと言ってきた。親としては、「いやいやいや、無理でしょ。英語力も、輝かしい経歴も、経済力もないこの状況で。日本の大学に行つて、交換留学を目指せばいいんじゃないの?」と説得してきたが、本書を一読して、これまで日本の学校からは遠く感じられた、海外の大学への進学、学部への正規留学が、「意外と行けるかもしれない」と身近に考えられるようになった。日本人学校に通う子どもたちや保護者の方にも、進路を考える上でとても参考になると思う。ぜひ手に取って頂きたい。

(選・評 見世千賀子)